

文部省『百科全書』における「骨相学」

—他者を視る近代のまなざし—

長沼美香子

(元立教大学)

This paper explores “Phrenology” of Chambers’s Information for the People edited and published by W. & R. Chambers and its Japanese translation of “Kossogaku,” one of the volumes of Hyakkazensyo projected and published by the then education ministry of the Meiji government. The purpose of focusing on these texts is to discuss our modern vision toward others from the viewpoint of translation studies. While Japan experienced turbulent modernization after opening her door to the world in the middle of the 19th century, phrenological mindsets prevailed in Japanese society. The translating of “Phrenology” greatly influenced our perspective in various ways, including literary expressions. The author tries to situate the translation text of “Kossogaku” together with its contemporaneous discourse in the context of Japan’s modernization.

1. はじめに

本稿は明治初期の啓蒙書である文部省『百科全書』のなかの一編「骨相学」を同時代テキストとともに読み、他者を視ることの自明性を日本の近代化というコンテキストにおいて問い直す試みである¹。英国ヴィクトリア朝に活躍したチェンバーズ兄弟が編集出版した *Chambers’s Information for the People* の PHRENOLOGY という項目を起点テキスト（原著）とする『百科全書』の「骨相学」は、長谷川泰（1842-1912）が翻訳、小林病翁（1828-1877）が校正を担当した翻訳テキストである。1876（明治9）年に文部省印行の分冊本となり、その後も有隣堂や丸善による合冊本に含められ、当時ある程度広く読まれたと考えてよいテキストであるが、文部省『百科全書』の「骨相学」をめぐる包括的な研究は管見の限りこれまでにない。

「phrenology = 骨相学」は古来の漢語「骨相」とは切断されている。phrenology は脳機能に基づく学説であり、頭蓋骨の形から他者の性格が類推できるというわかりやすさが大衆に受けて、19世紀前半の西洋で一時期大いに流行した。そして、開化期の

NAGANUMA Mikako, “Phrenology: Modern Vision Toward Others,” *Interpreting and Translation Studies*, No.14, 2014. pages 115-138. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

日本にも翻訳行為を通して紹介されて、視ることの近代を招来した。

この学説を本格的に詳述しているのが文部省『百科全書』の「骨相学」である。精神という目にはみえないものを脳という解剖学的実体で説明する言説は、近代日本のまなざしに何をもたらしたのか。「まなざし」は視線と言い換えてもよいが、ものごとの捉え方や世界の見方など精神活動を表象する²。異なる文化を架橋し、私たちの内面にまで影響を与えた翻訳テキストの読解を契機として、日本の近代化と骨相学的まなざしの問題系を多角的に論じてみたい。

2. 人体解剖と翻訳の近代

近代になって望遠鏡や顕微鏡など光学レンズを通して肉眼では捉えられなかった世界が開けたばかりでなく、人々の視線の欲望は人体の内側にも向けられた。スタッフォード (Barbara Maria Stafford) の表現を借りれば、「見えざるもののイメージ化」として、人間の肉体から仮借なく皮膚組織を剥離した人体解剖図が多数描かれた所以である³。

2.1 神経という翻訳語

近代日本の黎明を前にして、凶入り解剖学の翻訳書『解体新書』が1774(安永3)年に刊行されたのは、日本における視線の近代化と翻訳の関係にとって象徴的な出来事だった。人体の内側を描く解剖図は日常的には目に触れることのない臓器の構造と配置を可視化したのだ。そのような人体解剖図に関する翻訳テキストが、蘭学時代の幕開けを告げる本格的な翻訳書の嚆矢なのである。ダンツィヒの医学者クルムス (Johann Adam Kulmus) によるドイツ語原著の蘭訳版(『打係縷亜那都米』)を主な底本として、前野良沢、杉田玄白、中川淳庵らが千住小塚原(骨ヶ原)で罪人の腑分けを見学したのをきっかけに翻訳に挑んだ⁴。

彼らがその翻訳プロセスで直面した苦心については、晩年の玄白による『蘭学事始』に活写されているが、そこには「或いは翻訳し、或いは対訳し、或いは直訳、義訳とさまざまに工夫し」という翻訳論も展開されている。また『解体新書』「凡例」でも、「訳に三等あり」として、「翻訳、義訳、直訳」と訳出の三分法への言及がある。玄白の「翻訳・対訳、義訳、直訳」は、現在の「直訳、意識、音訳」に相当しよう⁵。たとえば、オランダ語 *zenuw* を訳した「神経」は、神気と経脈から造語された典型的な「義訳」(意識)の事例とみるのが通説だ。それまで *zenuw* は「世奴」という「直訳」(音訳)であったが、『解体新書』では「世奴此翻 神經其色白而強。其原自腦与背出也。蓋主視聽言動」とした。つまり「世奴此翻 神經、これを神経と訳す」として、「世奴」に代わって「神経」という訳語を用いたことを割注で説明しているのだ⁶。

もっとも通説にはいつの間にか神話も紛れこむ⁷。杉本つとむは洋学研究には「神話がすぎる」と苦言し、その一例として『蘭学事始』の著述内容の虚構性を糾弾し

ている。杉本によれば、『解体新書』の刊行に先立つこと百年、1682年（天和2）年頃に本木良意（ドイツ人医師で『日本誌』の著者ケンペル（Engelbert Kaempfer）と親交があった通詞）が訳した『和蘭全軀内外分合図』という人体解剖図がすでに出版されていた⁸。だから南蛮医術でも *nervo* (= *zenuw* = *nerve*) の存在は（「筋^{ネルボ}」として）知っていたのであり、玄白の翻訳苦労話も半ば眉唾ものということになる。とは言え、近代日本が生み出した視線を考えると、「神経」という翻訳語の誕生は色褪せない。玄白らにより「神経」と訳出された近代日本語が次第に定着し、『解体新書』からおよそ百年の時を経て、明治のまなざしと交差することになるのだから。

2.2 神経という近代

明治初期の文部省『百科全書』においては、「*nerve* = 神経」という翻訳の等価がしっかりと定着している。「骨相学」のテキストに出現する「神経」の件を読んでおこう。

神経モ亦然リ犬ノ嗅神経鷲ノ視神経頗ル大ナルカ如キ是ナリ小児ノ脳ハ大人ヨリハ小ニシテ其精神ノ力弱ナリ又大人ノ脳甚タ小ナルモノハ必ス呆痴ノ徴ナリ
 (...) 欧羅巴人ノ頭首ハ平均シテ中等ノ印度土人ト相比スレハ大人ノ小児ニ於ケルカ如シ歐人僅ニ三万ヲ以テ能ク印度人十万ノ衆キヲ征服スルハ蓋シ是カ為ナリ
 The same is true of a nerve. Some species of dogs have very large nerves for smelling, eagles for seeing, &c. A child's brain is smaller, and its mental power weaker, than those of an adult. A very small brain in an adult is the invariable sign of idiocy. [...] The average European head is to the average Hindoo as the head of a man to a boy; hence the conquest and subjection of a hundred millions of the latter by thirty thousand of the former.

骨相学の理論では、「*nerve* = 神経」や「*brain* = 脳」の発達が重要となる。嗅覚や視覚をつかさどるのは、それぞれ「嗅神経」と「視神経」であり、その大きさに着目するのだ。そしてヨーロッパ人の「頭首」の大きさを根拠に、インドの植民地化も正当化している。

この箇所先立ち、脳が諸器官の集まりであることを「脳ノ一器ニアラス衆器ノ相聚合セルモノニシテ」（*the brain is not single, but a cluster of organs*）と説明して、精神活動と脳の大きさの関係については、「各異ノ精神ノ発動ノ強弱敏鈍ハ脳ノ各部ノ大サ即チ其膨起ト相对称スル故ニ亦此各部ト相関渉ス」（*particular manifestations of mind are proportioned, in intensity and frequency of recurrence, to the size or expansion of particular parts of the brain*）と述べている。

ところで、三遊亭円朝が1859（安政6）年に創作した「累ヶ淵後日怪談」は、明治期になって当時の流行語である「神経」とかけた「真景」を織り込んで、1888（明治21）年に「真景累ヶ淵」として語り直された。その枕では、文明開化期の合理性によ

って幽霊を神経病の産物だとする前置きが語られる。

今日より怪談のお話を申し上げますが、怪談ばなしと申すは近来大きに廃りまして、余り寄席で致す者もございません。と申すものは、幽霊と云ふものは無い、全く神経病だと云ふことになりましたから、怪談は開化先生方はお嫌ひなさる事でございます。(…)狐にばかされるといふ事は有る訳のものでないから、神経病、又天狗に攫はれるといふ事も無いからやつぱり神経病と申して、何でも怖いものは皆神経病におつつけてしまひますが、現在開けたえらい方で、幽霊は必ず無いものと定めても、鼻の先へ怪しいものが出ればアツと云つて尻餅をつくのは、やつぱり神経が些と怪しいのでございませう⁹。

怪談や幽霊というオカルトは、近代を代表する「開化先生」には「神経」の病と映るのだ。西洋近代がもたらした「科学」による開化ゆえのことである。また同時期には、一竿齋宝洲による「こころのやみかいのかいだん神経開化怪談」(1884)という脚本形式の読み物もあった¹⁰。「神経」と「開化」の結合が魅力的な書名となる時代だった。

3. 骨相学という近代

3.1 西洋近代の phrenology

骨相学という翻訳語は、明治初期に phrenology を訳出した結果としての近代日本語である。phrenology は脳機能と精神の関係を論じた学説として、18世紀末の西洋に生まれた。これは当時の「科学」的理論であつたし、頭蓋骨の形からその人の性格が判断できるという明快さと相俟って大衆にも浸透したのだった。だが、19世紀後半からの大脳生理学の進展により、phrenology は疑似科学として葬り去られた¹¹。

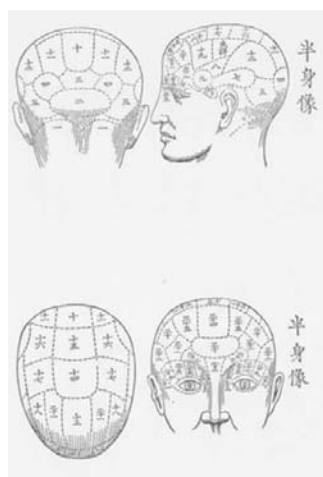
皮肉なことに phrenology の終焉を経て、この学説が主張した脳機能の局在論を示す証拠は着実に蓄積されていった。たとえば第一次世界大戦で被弾した兵士において、脳の損傷部位と後遺症による障害には関係が認められたし、より最近の fMRI を用いたイメージングの手法でも、認知機能が脳の特定部位に局在しているデータが得られている¹²。phrenology が主張したような頭蓋骨の形と性格の単純な関係性については否定されたものの、脳機能の局在は正しい前提だった。

phrenology はスイスのラファーター (Johann Caspar Lavater) による physiognomy (観相学)、つまり顔の造作からその人物の性格を判断するという主観的な方法に遡ることができる¹³。もっとも身体的外面と精神的内面との何らかの対応関係という着想そのものは、古くは紀元前のヒポクラテスやアリストテレスらも論じていた。けれども、適者生存や弱肉強食を柱とする近代のダーウィニズムに通底する physiognomy や phrenology の議論のなかでは、狂人・犯罪者・子ども・女性・劣性人種という排除される他者への先入観が極度に増幅されてしまうのが特徴的だ¹⁴。文明化の程度を示す指標として精密に計測された頭蓋や、写真技術によって固定された表情は、偏見に満

ちたまなごしの西洋近代を表象する「科学」であったと言える。

脳と精神活動を結びつける近代の「科学」的な考えは、ドイツ生まれの医師ガル（Franz Joseph Gall）とその弟子シュプルツハイム（Johann Spurzheim）から始まった。ガルは脳神経系の解剖学と生理学を研究し、脳が精神活動に対応した 27 個の器官（その数は後継者により拡張）の集まりであると主張したのである。そして脳の特定の部位における発達が脳機能に影響を及ぼすとして、脳を取り囲む頭蓋の大きさや形状から精神活動がわかるとしたのだ。頭蓋骨の精密な計測が実施され、いかにももっともらしい頭蓋骨マップも作成されて、脳に局在する器官と各機能の位置関係が図示された。文部省『百科全書』の「骨相学」に掲載された図でイメージしておこう（図 1）。

図 1：文部省『百科全書』の「骨相学」より



こうして他者の内面を目に映る頭の形によって視覚化して類推しようとしたのだ。かくして phrenology は、19 世紀の近代科学イデオロギーと視覚装置で通俗的なわかりやすさを具現することで、さまざまな階層の人々に広く受け入れられることとなったのである。

ガル自身は phrenology という語ではなく、Schädellehre (craniologie 頭蓋学) や Organologie (器官学) などという複数の用語を自らの学説にあてているが、1815 年に英国人フォースター（Thomas Ignatius Maria Forster）がガルの学説を英語で紹介した際に phrenology という名称が造語されて以降、この語をシュプルツハイムが継承したとされる。もっとも、アメリカ独立宣言にもその署名が残るラッシュ（Benjamin Rush）がすでに 1805 年、フィラデルフィアで phrenology という語を用いていたとも言われており、語の出自そのものは定かではない¹⁵。

ガルの学説は西洋近代の一時期を席卷し、なかでもヴィクトリア朝の英国で熱烈な支援者を得てさらに躍進した。英国で phrenology を広めたのは、スコットランドの穏健な社会改革派の弁護士ジョージ・クーム（George Combe）である。エディンバラでのシュプルツハイムの講義がきっかけとなって「エディンバラ骨相学論争」が起こるのだが、この時彼の講義を聴講して phrenology を初めて知ったクームは一途にこの学説に心酔していった。クームは 1820 年にエディンバラ骨相学協会を設立し、専門雑誌の創刊にまで至る熱の入れようだった。またその当時、ガルと訣別したシュプルツハイムの phrenology では、社会改革までも視野に入れて、生得的に優れた能力に恵まれた者が努力することで人類社会が進歩すると考えていた。したがってクームの言説もまた、脳機能の均衡のとれた発達で人々が幸福になり、それに連れて社会も発展するというものであった¹⁶。このようにヴィクトリア朝の phrenology は、社会進

化論や発達史観との親和性が高かった。

クームが1828年に刊行した *The Constitution of Man Considered in Relation to External Objects* は、1847年の第8版までに8万部以上のベストセラーとなり、『聖書』、*The Pilgrim's Progress* (『天路歷程』)、*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe* (『ロンビンソン・クルーソー』)に次ぐ売れ行きだったという¹⁷。ダーウィン (Charles Robert Darwin) の *On the Origin of Species* (『種の起源』)の発行部数が1859年の初版から1878年の第6版までに2万部に達しなかったことと比較すれば、この学説の人気の高さが想像できよう。

この唯物論的な学説は、英国のみならず19世紀西洋の近代知を縦横無尽にかけめぐった。たとえばヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel)、コント (Isidore Auguste Marie François Xavier Comte)、マルクス (Karl Heinrich Marx)、スペンサー (Herbert Spencer) などの著名な思想家からも注目され、バルザック (Honoré de Balzac)、ポー (Edgar Allan Poe)、メルヴィル (Herman Melville)、フロベール (Gustave Flaubert)、ヴェルヌ (Jules Gabriel Verne)、ドイル (Arthur Conan Doyle) という錚々たる文学者たちの表現にも顕著な影響を与えているのだ¹⁸。自然科学を超えて、このまなざしは同時代の社会や文化のなかに遍在している。特記すべきは、イタリアの犯罪学者ロンブローゾ (Cesare Lombroso) が主張した生来性犯罪者説で、これは phrenology を犯罪者の分析へと応用したものである。彼の主著 *L'uomo delinquent* (犯罪者論)には邦訳がなく、日本では *L'uomo di genio* (『天才論』)の方が有名だが¹⁹、ノルダウ (Max Simon Nordau) の *Die Entartung* (退化論)²⁰がロンブローゾに献辞を捧げていることからわかるように、生来性犯罪者説では犯罪者を外見で判断して退化した人間と見做したのだった。ちなみに、その犯罪者の外見はモンゴロイドの特徴と近似していた。

3.2 「phrenology = 骨相学」とは

phrenology という西洋近代に流行した「科学」は幕末開国期の日本にも紹介されて、さまざまな分野に拡散した。当時の日本にはスペンサーに代表される社会進化論の強い影響下にあり²¹、phrenology が説く西洋近代の視線を受容しやすい土壌は整っていたのである。

phrenology という単語は、phreno と logy という二つの形態素から成る。前半部 phreno はギリシャ語由来で、「心、精神、横隔膜」を表す。これに「～学、～論」という後半部 logy が組み合わされており、phrenology は、いわば「心学」「精神論」という意味になる。ではなぜ、近代日本において「phrenology = 骨相学」になったのか。かつて phrenology には「骨相学」以外の訳語もあったし、漢語としての「骨相」には phrenology 以前の歴史もあり、「phrenology = 骨相学」という等価は自明ではない。西洋近代の phrenology という「科学」的学説は、如何にして「骨相学」として日本の近代化のなかで成立したのであろうか。

明治期日本を代表する啓蒙思想家の西周は、私塾育英舎を1870(明治3)年に開設

し、「百学連関」などを講義した。オランダ留学の経験をもつ西は、西洋の学問を百科事典的に体系化して解説し、「性理学」(Psychology)を論ずる際に Phrenology の左ルビを「脳学」として説明した。

独逸に Gall⁺¹⁷⁵⁶₋₁₈₂₈なる人あり。Phrenology^{脳学}を發明せり。此の人の説に依るに、人の才能及び性は頭に係はると言へり。此説実に然ることにて、頭の大小脳の多少に依て人の才能及不才能あること顕然たり。

凡そ世界中人種五つの中、白哲人種を以て最上とす。其容貌、骨格都て美にして、頂骨大に前額高く、其精心聡明にして文明に達すへき性あり。

次に黄色人種、頭の形ち稍四角にして前額低し。次に赤色人種、頂骨小にして腮骨高し、南北亞米利加の人種是なり。次に黒色人種、頭の状細く長し、腮骨高く顛骨突出し前額低し、稍獸類に近く其性質懶惰にして、開化進歩の味を知らず。亞非利加砂漠の南方に在る土民是なり。次に茶色人種、亞非利加の海岸に近き諸島及び東印度のマラッカなる地の土民は此類なり。

併かし頭の大小に依ると雖も善悪ありて、獸類の如きは頭大なりとも脳たるもの少し。人も亦頭の大小脳の多少に依らざる所なり。

ガルの学は解剖を以て人の性理を得んと欲せし所なれとも、終に性理を得るに至らず。然れとも人の性質は頭脳の多少に依るか如き、都て人体の發明をなせしこと甚た多しとす²²。

当時の辞書における phrenology としては、1873(明治6)年に刊行された柴田昌吉・子安峻編『附音挿図英和字彙』に「Phrenologic, Phrenological^{コツツウ} 骨相学ノ、^{シン}心学ノ」「Phrenologist 骨相学者、心学者」「Phrenology 骨相学、心学」とある。この英和辞書には「phrenology = 骨相学」が早くも出現するが、同時に「心学」も併用されてゆらいでいたことがわかる²³。

またヘボン (James Curtis Hepburn) による『和英語林集成』の初版(1867)と再版(1872)には、phrenology あるいは「骨相」に相当する立項はないが、第3版(1886)には「Kossōron コツサウロン 骨相論 n. Phrenology」(和英の部)、「Phrenology, n. Kossōron」(英和の部)が加えられている。『哲学字彙』(1881)では「Phrenology 骨相論」だが、『哲学字彙(英独仏和)』(1912)では「Phrenology (Ger. Phrenologie, Fr. phrénologie) 骨相学」となっている。ただし専門的な辞書では岩川友太郎『生物学語彙』(1884)のように、「Osteology, 骨相学」(ちなみに現在 osteology の定訳は「骨学」としている例などもある。1886(明治19)年完成の大槻文彦『言海』(1889-91)には「こつさうがく(名)骨相学^{ツグイコツ} 頭蓋骨ノ形ヲ相テ予メ人ノ性質運命ヲ知ル術」とあり、日本語辞書でも明治半ばには「骨相学」が立項されている²⁴。

この学説に関する詳細な内容を明治初期の日本に紹介したのが、文部省『百科全書』

の長谷川泰訳・小林病翁校「骨相学」という翻訳テキストであった。国立国会図書館に現在所蔵されている資料のなかで、「骨相」というキーワードを含むものとしては最古の一冊である²⁵。

4. 文部省『百科全書』の起点／翻訳テキスト

4.1 骨相学とロバート・チェンバーズ

文部省『百科全書』の起点テキストは、19世紀の英国エディンバラで出版社を興した兄ウィリアム・チェンバーズ(William Chambers)と弟ロバート・チェンバーズ(Robert Chambers)というチェンバーズ兄弟が編集し刊行した大項目の百科事典的啓蒙書 *Chambers's Information for the People* である。実は弟のロバートは、1859年のダーウィンによる *On the Origin of Species* に先駆けて、かつダーウィン以上に大きな物議を醸した進化論を匿名で発表した人物でもあったことは特筆に値しよう²⁶。1844年にロンドンの出版社 John Churchill から *Vestiges of the Natural History of Creation* の初版が刊行された。著者名を伏せたままで出版され続けて版を重ねたが、チェンバーズ兄弟没後の第12版(1884)の巻頭ではじめてロバート・チェンバーズの名が暴露されたのである。本書は宇宙・生命体・人間社会を含めたあらゆる creation「創造物」の発展仮説について、natural history「自然史、博物学」の観点から vestiges「痕跡」を解説した一般大衆向けの本で、後のスペンサー流の社会進化論的内容もすでに盛り込まれていた。

ロバートは骨相学を熱心に支持していた。骨相学が彼の思想的支柱であったのは、この学説が自分の考える社会改革へとつながるものだと確信していたからだ。したがって当然のことながら、先の *Vestiges of the Natural History of Creation* には骨相学からの影響が散見する。科学史の松永俊男は、「骨相学の社会改革論と万物の進歩観を結びつけ、これを科学的知見によって立証しようとしたもの」と本書を総括している²⁷。バッキンガム宮殿のヴィクトリア女王夫妻、さらには若き日のナイチンゲール(Florence Nightingale)もこの本の熱心な読者だったと言われているが、同時にまた、科学者や宗教者からは批判が続出し、とくにスコットランド福音派の科学者たちを激怒させた問題の書であったという。したがって、著者存命中は匿名本であったわけだ。この同じ著者による同時代テキストが、文部省『百科全書』の起点テキストなのである。

4.2 長谷川泰訳・小林病翁校「骨相学」という翻訳テキスト

チェンバーズ兄弟が編集出版した *Chambers's Information for the People* の一項目である PHRENOLOGY は、骨相学に傾倒していたロバート自身が自ら執筆していた可能性が高いと思われる。これを翻訳したのが文部省『百科全書』の長谷川泰訳・小林病翁校「骨相学」であり、1876(明治9)年に分冊本として刊行された。「骨相学ノ理論」(PRINCIPLES OF PHRENOLOGY)に始まり、脳機能の35分類の詳述を含む内容

で、この学説の微に入り細を穿つ解説となっている²⁸。

テキストの冒頭を引用する。

フレノロジーハ希臘語ニシテ精神論ノ義ナリ殊ニ此名称ヲ以テ通行スル学科ハ
一千七百五十七年ニ生レシ日耳曼医士ドクトルジューセツプゴール氏ノ發明セ
シ所ニシテ同氏嘗テ学童タリシ頃其学友ノ記憶常ニ已ニ優リシモノハ眼目皆著
ルシク凸出スルヲ目撃シ是ニ由テ各異ノ才智ハ腦ノ各部ト相關係スルヲ察シ且
ツ記憶ノオアル他輩ニ於テモ亦同一ノ形状ヲ発見シ乃チ更ニ以為ラク特里記憶
ノミナラス他ノ性質才智モ亦外部ノ記標アリテ之ヲ表示スルナラント遂ニ心ヲ
潛メ思ヲ凝ラシ専ラ性質ノ顯著ナル状態ヲ觀察シテ各其顯著ヲ検査セシニ果シ
テ其形状各異ニシテ某甲ニ於テハ某乙ニ見サル所ノ突起及ヒ凹溝アリ隨テ其性
質相異ナリキ

PHRENOLOGY is a Greek compound, signifying a discourse on the mind. The system which exclusively passes by this name was founded by Dr Francis Joseph Gall, a German physician, born in 1757. Dr Gall was led, when a school-boy, to surmise a connection of particular mental faculties with particular parts of the brain, in consequence of observing a marked prominence in the eyes of a companion who always overmatched him in committing words to memory. Finding the same conformation in others noted for the same talent, he reflected that it was possible that other talents might be accompanied by external marks, and that dispositions might also be so indicated. He devoted himself to observing marked features of character; and on examining the heads, was struck with differences in their forms, there being prominences and hollows in some not found in others, with corresponding variations of character in the individuals.

この冒頭部に「骨相学」という語は登場せず、「フレノロジーハ希臘語ニシテ精神論ノ義ナリ」(PHRENOLOGY is a Greek compound, signifying a discourse on the mind.) という説明で始まっている点は見過ごせない。PHRENOLOGY はまず音訳された。「フレノロジー」は「精神論」(a discourse on the mind) なのであり、「骨相学」ではないのだ。「骨相学」に「フレノロジー」をルビとして組み合わせることも可能であったはずだが、そのような選択すらなされなかった。つまり冒頭では、「phrenology = 骨相学」という翻訳の等価は出現せず、「骨相学」が翻訳語として成立していない状況からこの翻訳テキストは始まるのである。

ではどのようにして、翻訳行為が「phrenology = 骨相学」をテキストの展開のなかで立ち上げていったのだろうか。

冒頭で「フレノロジー」を「精神論」と定義したのちに、学説の創設者ガルの逸話——ガル少年による「脳ノ各部」(particular parts of the brain) への着目——が挿入されている。つまり、学友らの「各異ノ才智ハ腦ノ各部ト相關係スル」(a connection of

particular mental faculties with particular parts of the brain) という発見である。ガルは「外部ノ記標」(external marks) と「性質才智」(talents) を結びつけることが可能であると考へ、頭の「突起及ヒ凹溝」(prominences and hollows) を観察した。解剖学的知見からではなく、頭のかたちで代表される「骨相」から学友の才能を見抜こうとする視線である。こうしてガルを phrenology の創設者として位置づける文脈で、「フレノロジー」は「骨相」と限りなく接近していくのだ。

引用した冒頭部の次に続くテキストでは、ガルやその弟子のシュプルツハイムに加えて、学説の普及に貢献したクーム兄弟 (George Combe と Andrew Combe) を軸に、学説史の概略を簡潔にまとめている。そして “Dr Gall never took any particular step for making phrenology known in our island” という一文があり、これが「同氏ハ骨相学ヲ開クカ為ニ我大英ニ来遊セシコトナカリシ」(強調は引用者) と訳されて、ここに「phrenology = 骨相学」が初登場する。

こうした「phrenology = 骨相学」という等価の出現は唐突にも思われるが、先の逸話を思い起こせば、すでに伏線は張られていたのだと腑に落ちる。以後このテキストに頻出する phrenology というキーワードは、すべて「骨相学」として反復されてテキスト内で定着していく。この学説を綿密に解説しながら、同時に「phrenology = 骨相学」を立ち上げ成立させる、まさにその成立事情を翻訳プロセスにおいて、文部省『百科全書』の「骨相学」という翻訳テキストはリアルに記憶しているのである。

4.3 同時代テキストのなかの骨相学

文部省『百科全書』の「骨相学」は明治初期の翻訳テキストであるが、同時代の出版物として1876(明治9)年に文部省より刊行されたハート著 (John Seely Hart)、カステール (Th. J. van Kasteel) 訳、小林病翁校による『学室要論』がある²⁹。オランダ人のカステール(『百科全書』の「体操及戸外遊戯」「戸内遊戯方」の翻訳者)による翻訳を、文部省『百科全書』の「骨相学」と同じ小林病翁が校正した教育理論書で、その序文は文部省の大井謙吉(『百科全書』の「羅馬史」「花園」の翻訳と「論理学」の校正を担当)が書いている。ただし、本書の「第二十三編 骨相学」(XXIII. PHRENOLOGY)は、学説そのものを解説したものではない。

日本におけるガルの学説への言及は幕末の蘭学書にもすでにあつたが、そこでは骨相学という語は用いられていなかった。たとえば、島村鉉仲(鼎甫)がラウバハ(Douwe Lubach)の医学書を翻訳した『生理発蒙』(1866)の「脳脊髄効用之論」では「相脳学」と訳出している³⁰。

森鷗外には「ガルの学説」(1900-01)という小論があり、「全神経系解剖生理の概論及脳解剖生理の細論」の概要を「総説」「解剖説」「生理説」に分けて解説している³¹。専門用語を多用した小論の冒頭に「フランツ・ヨオゼツフ・ガル Franz Joseph Gall は南独逸の人にして、嘗て維也納に在りて医を業とす。其機関学 Organologie の講筵は、一面公衆の曷采を博し、一面奥太利政府の嫌疑を受けたり」として、鷗外は

Organologie を「機関学」とした。骨相学という語は用いていないが、そもそもガル自身も phrenology という語を使用していないことは前に述べたとおりである。

4.4 「骨相学」の翻訳者と校正者

文部省『百科全書』の「骨相学」を翻訳したのは、医学者、政治家として活躍した長谷川泰である。『百科全書』において、もう一編「植物綱目」の翻訳も担当している。彼は漢方医長谷川宗斎の長男として 1842(天保 13)年に越後国古志郡福井村に生まれ、漢学者鈴木弥蔵に師事し、父からは漢方医学を学んだ。そして 1862(文久 2)年、西洋医学修得のために下総佐倉の順天堂に入学し、佐藤尚中・松本順に師事した。1869(明治 2)年に大学東校の少助教となり、1874(明治 7)年に長崎医学校校長に就任する。1876(明治 9)年には、東京本郷元町に私立医学校の済生学舎を開校し多数の医者を世に送り、東京府病院長・内務省衛生局長なども歴任して医事行政に貢献した。1890(明治 23)年に衆議院議員、1892(明治 25)年に東京市会議員となったが、1903(明治 36)年には、政府の学制強化から済生学舎を廃校にして隠居した³²。

長谷川泰の翻訳を校正したのは、小林病翁(病弱であったための号で「ヘイオウ」と読む)で、本名は虎三郎。小林は文部省編書課員であり、『百科全書』ではほかにも「法律沿革事体」の校正を担当している。佐久間象山門下で学び、戊辰戦争後に長岡藩大参事を務めた人物である。長岡での人材育成のために 1869(明治 2)年に国漢学校を開設し、また翌年には寄贈された米百俵をもとにして、現在の長岡高校の原型を設立した³³。この米百俵にまつわる逸話は、後に山本有三の戯曲『米百俵』として有名になり、周知のように後世にも伝えられるところとなった。

長谷川泰という医学の専門家が翻訳を行い、小林病翁という国学と漢学に明るい儒者が校訂を加えたのが文部省『百科全書』の「骨相学」で、医学の専門知識と伝統的な教養が融合された翻訳テキストである。

5. 骨相学的な語り

19 世紀前半に西洋で流行した phrenology が日本へと初めて紹介された時期は明確に特定できないが、先述のとおり幕末の蘭学者らにもある程度は知られていたようだ。漢語としての「人相」「観相」「骨相」などという下地があったにしても、phrenology は西洋由来の学説として日本で受け入れられた。明治初期に「骨相学」と訳出された文部省『百科全書』の一編は、「phrenology = 骨相学」という翻訳語の初出に限りなく近く、この学説を詳述したものとして、近代日本における骨相学を考えるうえで画期となる翻訳テキストである。近代的科学性にけん引された文明開化のなかで、脳や神経に表象される解剖学的視線が拡散し他者の内面を可視化していった。そして、文学表現もその例外ではなかった。

5.1 写実と骨相学

骨相学は近代日本文学を変えた。

近代的写実主義は坪内逍遙に始まる、とするのが日本文学史の定説であろう³⁴。ただし、逍遙自身は「写実」ではなく「摸写」という語を用いている。文学士坪内雄蔵（逍遙）による『小説神髓』（1885-86）は、「小説の美術たる由を明らかにせまづ美術の何たるを知らざる可らず」と、「小説」を「美術」としたうえで、「美術」とは何かを問うことで始まる文学理論である（ここでの「美術」は現代の「芸術」に相当）。逍遙はフェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa）の『美術真説』や文部省『百科全書』の「修辞及華文」³⁵なども踏まえて、「美術」としての文学論を展開した。そして小説の種類について、「摸写小説」（artistic novel）を通俗的な勧懲小説と対比しながら、次のように説明する。

摸写小説（ア、チヌツク。ノベル）ハ所謂勧懲とハ全く其性質を異にしたるものにて其主意偏に世態をバ写しいだすに外ならざるなりされバ人物を仮作するにもまた其脚色を設くるにも前に述べたる主眼を体して只管仮空の人物として仮空界裡に活動せしめて真に逼らしめむと力むるものなり譬バ詩人が詩歌をものして真景を写し真情をはき画工が丹青をもて花鳥山水を描き彫像師が録をもて人またハ獣の形を彫れるが如く専ら真に逼るを主として趣向を構へ列伝をまうけ人情世態を穿てるものなり³⁶

さらに逍遙は登場人物の性質描写について、「陰手段」と「陽手段」という二つの方法を説明し、「あらはに人物の性質を叙せずして暗に言行と挙動とをもて其性質を知らする法」が日本での伝統的描き方で、これが陰手段と呼ばれる。それに対して陽手段では、「まづ人物の性質をばあらはに地の文もて叙しいだして之を読者にしらせおくなり西洋の作者ハ概して此法を用ふるものなり」という。そして陽手段のためには「あらかじめ心理学の綱領を知り人相骨相の学理をしも会得せざれば叶はぬことなり」（強調は引用者）としている³⁷。この文学理論を実践した同年の逍遙『当世書生気質』では、主人公の小町田繁爾が次のように描かれた。

其容体はいかにといふに。年の比ハ二十一二。瘦肉にして中背。色ハ白けれども。麗やかならねバ。まづ青白といふ。兒色なるべし。鼻高く眼清しく。口元もまた尋常にて。頗る上品なる容兒なれども。頬の少しく凹たる塩梅。髪に癖ある様子などハ。神経質の人物らしく。俗に所謂苦勞性ぞと傍で見ると笑止らしく³⁸。

人物の年恰好と体格をざっと述べたうえで容貌に移り、「鼻高く」「頬の少しく凹たる」という顔の骨相に依拠して「神経質」なのではないかと推測するのだ。語り手は

「陽手段」を用いて、主人公の容体という外面を描くことで彼の性質という内面を表現しようとしている。亀井秀雄は、逍遙の文学理論『小説神髓』やその理論に基づいた実作である『当世書生気質』に、文部省『百科全書』の「骨相学」からの影響を指摘する³⁹。菊池大麓訳「修辞及華文」が『小説神髓』に長く引用されていることを考えれば、逍遙が同じ『百科全書』の一編である「骨相学」も知っていたことは確かであろう。

また、二葉亭四迷の評論「小説総論」（1886）では「摸写といへることハ実相を仮りて虚相を写し出すといふことなり」と述べられており、これは「逍遙のリアリズム論の批判的深化」と捉えてよい⁴⁰。だからこそ四迷の『浮雲』（1887-89）は、近代日本の小説の嚆矢とされるのだ。この流れは硯友社を経て言文一致運動と連動し、明治40年代の自然主義へと接続されていく。逍遙『当世書生気質』よりもさらに克明に顔の造作を描写することで、人物の性格やその運命までも表現しようとしたのが『浮雲』の語りである。その第一回では、ふたりの登場人物は固有名詞を与えられず、次のような外見を持つ男として紹介されている。

途上人影の稀れに成つた頃同じ見附の内より兩人の少年が話しながら出て参つた。一人は年齢二十二三の男。顔色は蒼味七分に土氣三分どうも宜敷ないが秀た眉に儼然とした眼付でズーと押徹つた鼻筋唯惜哉口元が些と尋常でないばかり、しかし締はよさそうゆゑ絵草紙屋の前に立つてもパツクリ開くなどいふ氣遣いハ有るまいが兎に角顙が尖つて頬骨が露れ非道く癩れてゐる故か顔の造作がとげとげしてゐて愛嬌氣といつたら微塵もなし。醜くはないが何処ともなくケンがある。背はスラリとしてゐるばかりで左而已高いといふ程でもないが瘦肉ゆゑ半鐘なんとやらといふ人間の悪い渾名に縁が有りさうで、年数物ながら摺畳皺の存じた霜降「スコツチ」の服を身に纏つて組紐を盤帯にした帽檐広な黒羅紗の帽子を戴いてゐ、今一人は前の男より二ツ三ツ兄らしく中肉中背で色白の丸顔。口元の尋常な所から眼付のパツチリとした所は仲々の好男子ながら顔立がひねてこせこせしてゐるので何となく品格のない男⁴¹。

ひとりは「鼻筋」が通り「顙」が尖り「頬骨」が出たなどと顔の骨相にこだわって描かれた結果、「とげとげして」「何処ともなくケンがある」と語られる。第二回ではこの男に「内海文三」という名前が付与され、「性質が内端」であることも同時に披露される。もうひとりは「丸顔」で「こせこせ」した「品格のない男」で、主人公の文三と対比的な輪郭の顔をもつ。彼の姓が「本田」であることが判明するのはずっと遅く、第五回まで読み進める必要があるが、その次の第六回では「本田昇」とフルネームで登場し、世辞に長けている点など文三とは正反対の要領の良い性格が描かれて、ふたりの行く末が暗示される。回を重ねて読み続けるなかで、第一回での彼らの骨相から想像された内面が次々と明らかになり、結末は骨相学的な期待を裏切らない。語

り手と読者が骨相学的なまなざしを共有しながら、『浮雲』という文学テキストは展開するのである。

こうして顔の造作を観察して骨相を描き、その人物の内面を表現する方法が獲得された。「ありのままに摸写する」(逍遥)ことを理想とした写実主義小説において、骨相学的に他者を視ることでその性格や運命が推し量られる。登場人物の外側、特に顔の骨相を克明に模写した文学が内面を発見し始めていくのである。

5.2 写生と骨相学

骨相学的なまなざしによる表現方法は、正岡子規らの「写生文」(叙事文)にも通じる⁴²。子規の提唱を受け継いだひとり寒川鼠骨は、1900(明治33)年5月の『ホトトギス』に写生文「新囚人」を発表した。この鼠骨の作品は写生文として高く評価されており、子規は「獄中ノコトハ君ノ文ニヨリテ伝ハリ君ノ名ハ獄中談ニヨリテ残ル位ノ大切ナル文章」(明治33年6月11日付、鼠骨宛書簡)と称賛した。当時、鼠骨は新聞『日本』の署名人だったが、国分青厓の社説が山縣有朋首相への誹謗ということで官吏侮辱罪となり、巢鴨監獄に収監されたことがあった。その時の様子を描いた体験記である「新囚人」に、骨相学という語が繰り返し使用される場面がある(強調は引用者)。

彼れといふのは二十七八歳の岩疊に出来た男で、余の未熟な骨相学の智識によって判断する所によると、決して悪い事をするやうな面構へじやない、否寧ろ至極の善人で至極やさしい父たる人であるらしい。余は何故に彼れのやうな善人がコンナ処へやつて来たのであらうか、或は余の骨相学は少しも真を穿ち得ないのであらうか、余が彼れを善人と思つたのは全く間違ひで、実は善人でなく単に善人らしいのに過ぎなかつたので、まことは外面のみの菩薩たるに止るのであらうか、決してさうらしくはないのであるが併し人は見かけに依らぬといふ格言もあるものゝ事だから、などゝ思つて遂ひに彼れに彼れの罪名と職業とを尋ねた、所が余の骨相学は案外間違つて居なかつたから不思議だよ、彼れは余と同罪であつて官吏侮辱といふ罪名の下に投獄されたのである、彼れは余の想像の如く芝浜あたりの某鉄工場へ通勤してゐた正直な勤勉なさうして善良な一個の職人である、之れ彼れの余に答ふる所であつて少しも嘘のない事実である⁴³。

ここでは、もはや綿密な顔の造作を描写する必要さえなく、作品内で骨相学の正否が問われるまでに、そのまなざしが前提となり読者と共有されている。まず語り手は骨相学の知識で、「彼」を「善人」と思うが、その直後に「人は見かけに依らぬといふ格言」も頭を過り、実際に尋ねてみるという行為に出た。「彼」の罪名が自分と同じ「官吏侮辱」と判明した結果、その人物はやはり「善良な一個の職人」であることが事実として確認されて、骨相学の正しさに帰結するのである。

鼠骨の写生文では、西洋近代の「科学」である骨相学に仮託することによって、客観的な写生という虚構を成立させたとも言える。「未熟な骨相学の智識」という控えめな表現ながらも、その判断が「科学的」な観察に基づいて描写され、「少しも嘘のない事実」が、骨相学という学説を読者と共有することで裏付けられるのだ。

坪内逍遙、二葉亭四迷、そして寒川鼠骨らの文学作品における骨相学的な語りは、登場人物の外側から内面を発見していく手法に他ならない。唯物論的に性格を脳へと還元する視線が、写実あるいは写生的表現に通底している。近代日本文学において骨相学的に観察された顔の造作が語られ始めたのである。そもそも顔というありふれた風景など、かつては文学作品の対象にさえならないほどに平凡な日常でしかなかった。骨相学による他者を視るまなざしは日本文学の近代をもたらしたのだ。

6. 疑似科学の近代

6.1 迷信としての骨相

登場人物の顔という日常を文学テキストに語らせた骨相学の視線は、近代の非日常的世界にも開かれていた。明治期は心霊術や催眠術とともに記憶術が大流行した時代でもあり、現代の受験参考書の淵源となるような記憶術に関する多数の著書が、当時の立身出世イデオロギーを下支えしていた。この流行は、記憶術ブームの背後に人間の脳や内面への近代科学的な関心があったことだ。中村正直『西国立志伝』(1871)や福澤諭吉『学問のすゝめ』(1872-76)がベストセラーとなった頃に、立身出世を要請する競争社会の原型はすでに出来上がっていた⁴⁴。そのなかで勝者となるためには効率的な記憶術が求められ、さらに催眠術のブームもあった。他者の内面を脳機能に基づいて「科学的」に解明したかに思われた骨相学の近代は他方でまた、オカルト的なものへと接続されてしまう危うさも秘めていたのである⁴⁵。

近代日本における骨相学の末路は、医学史の立場から富士川游の解説が暗示している。「信仰と迷信に関する通俗科学展覧会」のために収集した資料に基づいて、「骨相術」を迷信として総括したのである。

骨相術とは、西洋にて行われる相法で、これを「フレノロジー」(Phrenologie)という。頭骨表面の形状を見てその人の精神作用の特性を判断するの術である。始めて、この術を唱えたのは、奥太利の解剖学者のガル氏(1757年生、1828年没)で、その説くところに拠れば、人々の脳髄には理解・感情・衝動等個々の精神作用を営む部分があるとするので、これを精神器官と称するのである。そうして、この部分に相当する頭骨の形状等を観て、外部からその発達を窺い知ることが出来るから、それに基づきてその人の精神作用の特性が知られるというのが骨相術の趣旨である⁴⁶。

1910(明治43)年2月に東京帝国大学で行った心理学通俗講話会での「骨相と人相」

においても、富士川は「身体の外表を見て、それから、その人の性格若しくは運勢を判断する方術」と述べて、「術」としての側面を強調している⁴⁷。骨相「学」ではなく、迷信を取り込んだ疑似科学の骨相「術」として静観しようとする医学史の立場が感じられる。

ヴィクトリア朝の英国で骨相学の中心人物であったジョージ・クームの *A System of Phrenology* が、永峯秀樹訳『性相学原論』（1918）として邦訳が出版されたのも同時期である⁴⁸。ここでは骨相学ではなく「性相学」と訳されたが、この訳語は石龍子が「性相学会」を創設し、機関誌『性相』を発行していたことと無関係ではなからう⁴⁹。石家は江戸期に初代石龍子が医業の傍ら観相学を始めたが、第3代するとき1800（安永9）年には、観相学が医学か陰陽学かで裁判にまでなったことも伝わっている。そして、明治末期から大正末期にかけて「石龍子ブーム」の到来もあった⁵⁰。

このような時代を経て「phrenology = 骨相学」は拡散しながらも、近代の疑似科学として無意識の世界へと退いていったのだ。

6.2 科学とオカルトの近代

私たちの心や精神という内面は、不可視であるがゆえに神秘的である。19世紀の骨相学という近代は、脳や神経という「科学」でそれを可視化しようと試みた。ウィーンの医者メスメル（Franz Anton Mesmer）が理論化した動物磁気（animal magnetism）が「コックリさん」を呼び込み、近代催眠術につながり、さらに写真技術から心霊写真が生まれるという具合に、近代というのは「科学」がオカルト的ないかがわしさへと容易に反転する心霊主義の時代でもあった。メスメルの唱えたメスメリズムでは、動物磁気という宇宙的流体の存在にその理論的基盤を依拠していた⁵¹。

オッペンハイム（Janet Oppenheim）も指摘するように、心霊主義は近代科学の装いをいつも身にまとっていた。英国ヴィクトリア朝においてはその科学崇拜のなかで、「強力な科学的証拠と科学的議論が、伝統的宗教の信念を引き裂いておきながら、人間の精神の要求に応える新たな庇護を与えることがないのを見て、恐怖にかられるヴィクトリア人も少なくなかった」という⁵²。そこで、心と身体という古い議論への新しい手がかりを与えたのが、当時の骨相学とメスメリズムであり、いずれも19世紀前半の英国で隆盛した思潮であったのだ。どちらも唯物論的であるとともに、精神へも目配りがきいていた点が共通している。

最後に、骨相学には現代の心理学への貢献があったことも付け加えておこう。これは、脳が心の器官として思考と感情の中心であるという仮説によるものだ。骨相学の理論的基盤は脳機能の局在論であり、脳という肉体器官を「経験主義的観察と機能的推論の対象」とした⁵³。骨相学の唯物観は心という問題系を形而上学から救い出すものでもあったのだ。脳器官の特定の部位や頭蓋骨の形状と人間の性格や個性との結びつきを先験的に想定してしまった点のはのちに批判されたが、他方で脳機能に対する臨床的関心を喚起するきっかけともなり、心理学という近代的学知の先駆でもあった⁵⁴。

7. おわりに

社会進化論的なダーウィニズムの時代思潮と相俟って、phrenology は幕末開国期の日本に到来し拡散した。本稿では、西洋近代の「科学」的学説である phrenology を詳述した *Chambers's Information for the People* とその翻訳テキストをめぐって、同時代の言説とともに考察した。明治初期の文部省『百科全書』という国家的プロジェクトは歴史の転換期に企図された翻訳事業であり、その一編、長谷川泰訳・小林病翁校「骨相学」は、「phrenology = 骨相学」という等価をまさに立ち上げた翻訳テキストである。英国ヴィクトリア朝に流通した啓蒙書を翻訳する行為によって、西洋近代の視線が骨相学という近代日本語として成立したのだった。

近代日本の文学者らが理想とした写実的描写は、ありのままを模写することであった。登場人物の外見から内面を発見するために顔の骨相を観察し、語り手の視神経がそれを脳に伝えて語らせた。骨相学的な近代の視線が虚構を構築し始めたのである。

骨相学という近代は他者を視るまなごしの虚構化へと開かれ、また神秘的な内面を可視化した。だから神経や脳への骨相学的関心はオカルトや心霊主義ともつながっていた。疑似科学となった骨相学は、もはや現在ではその痕跡さえ忘れられているが、「phrenology = 骨相学」とは視覚が他の感覚を凌いで支配的に優位となった時代だからこそ流行した、極めて近代的な学説であった。

【著者紹介】

長沼美香子 (NAGANUMA Mikako) 研究分野は通訳と翻訳の理論・実践・教育。『日本の翻訳論』(共編著)(法政大学出版社、2010)、『深層文化』(翻訳)(大修館書店、2013)、「身体教育という近代」『言語態』第13号(東京大学言語態研究会、2014)ほか。

【注】

1. 文部省『百科全書』は、箕作麟祥や西村茂樹を中心に明治初期に企図された大規模な国家的翻訳プロジェクトの成果である。各種異本が現存し編名のゆれもあるが、1983-86年に青史社が復刻した全編のタイトルは次のとおり。

天文学 気中現象学 地質学 地文学 植物生理学 植物綱目 動物及人身生理
 動物綱目 物理学 重学 動静水学 光学及音学 電気及磁石 時学及時刻学 化学篇
 陶磁工篇 織工篇 鋳物篇 金類及鍊金術 蒸気篇 土工術 陸運 水運
 建築学 温室通風点光 給水浴澡堀渠篇 農学 菜園篇 花園 果園篇 養樹篇
 馬 牛及採乳方 羊篇 豚兔食用鳥籠鳥篇 蜜蜂篇 犬及狩猟 釣魚篇 魚獵篇
 養生篇 食物篇 食物製方 医学篇 衣服及服式 人種 言語 交際及政体 法律
 沿革事体 太古史 希臘史 羅馬史 中古史 英国史 英国制度国資 海陸軍制
 欧羅巴地誌 英倫及威爾斯地誌 蘇格蘭地誌 愛倫地誌 亞細亞地誌 亞弗利加及
 大洋州地誌 北亞米利加地誌 南亞米利加地誌 人心論 骨相学 北欧鬼神誌 論
 理学 洋教宗派 回教及印度教仏教 歳時記 修身論 接物論 經濟論 人口救窮
 及保險 百工儉約訓 國民統計学 教育論 算術及代数 戸内遊戯方 体操及戸外

遊戯 古物学 修辞及華文 印刷術及石版術 彫刻及捉影術 自然神教及道德学
幾何学 聖書縁起及基督教 貿易及貨幣銀行 画学及彫像 百工応用化学 家事儉
約訓

本稿での文部省『百科全書』の引用は、基本的に青史社復刻版による。主な先行研究としては、福鎌達夫『明治初期百科全書の研究』風間書房、1968年、杉村武『近代日本大出版事業史』出版ニュース社、1967年など。また本稿での引用全般ではルビや傍線を適宜省略している。

2. たとえば英語の‘I see.’は「みる＝わかる」ことであり、日本語には「話がみえない」つまり「話（の内容）が理解できない」という表現がある。ことほど左様に視覚は精神活動に直結する。

3. 大部の書、バーバラ・M・スタフォード『ボディ・クリティシズム——啓蒙時代のアートと医学における見えざるもののイメージ化』（高山宏訳）国書刊行会、2006年の序章では「見える知」（17-74頁）を語り、「切解」（76-180頁）の章では18世紀西洋のパラダイムとして、解剖学とそのメタファーを観相学も含めて論じている。

4. 岩崎克己（片桐一男解説）『前野蘭化2 解体新書の研究』平凡社、1996年、杉本つとむ『解体新書の時代——江戸の翻訳文化をさぐる』早稲田大学出版部、1997年などに詳しい。現代語訳としては、酒井シズ『新装版解体新書』講談社学術文庫、1998年がある。

5. 訳語の三分法は、『和蘭医事問答』『解体新書』『重訂解体新書』に共通するが、意味するところにずれもある。

6. 「神経」と訳出した経緯については、建部清庵との間で交わされた書簡集『和蘭医事問答』に記されている。建部清庵は一関藩（岩手県一関市）の名医として知られ、その門下生には大槻玄沢もいた。1795（寛政7）年の『和蘭医事問答』は沼田次郎・松村明・佐藤昌介校注『日本思想大系 洋学 上』岩波書店、1976年に所収。吉田忠「『解体新書』から『西洋事情』へ」芳賀徹編『翻訳と日本文化』山川出版社、2000年なども参照されたい。

7. 『日本国語大辞典』によれば、「神話」とは「一般には絶対的なものと考えられているが、実は根拠のない考え方や事柄」である。

8. 「神経」の訳語については杉本の前掲書、23頁。『蘭学事始』の虚実については、杉本つとむ『日本翻訳語史の研究』八坂書房、1983年、315-317頁。

9. 三遊亭円朝（小相英太郎速記）『真景累ヶ淵』『三遊亭円朝集』（興津要編）筑摩書房、1965年、212頁。1859（安政6）年、円朝が21歳の時「累ヶ淵後日怪談」として発表したものだが、「神経」と「真景」をかけたのは円朝最員の漢学者、信夫軒軒による。

10. 復刻版の解題で佐藤至子は、その内容を「旧士族の男が芸者に迷い妻を離縁、妻は堀に投身し、男と芸者は妻の幽霊に苦しめられるが実は妻は生きていたという筋立てを、開化風俗の描写を交えて書いた脚本形式の小説」と紹介している。

11. 骨相学の全体像については、ステーブン・シェイピン「エディンバラ骨相学論争」ロイ・ウォリス編『排除される知——社会に認知されない科学』青土社、1986年、オッペンハイム『英国心霊主義の抬頭』工作舎、1992年、上山隆大「身体の科学——計測と器具」大林信治・森田敏照編『科学思想の系譜学』ミネルヴァ書房、1994年などに詳しい。

12. マイケル・オーシェイ『脳』（山下博志訳）岩波書店、2009年、29-30頁。また、失語症研究におけるブローカ（Pierre Paul Broca）の名に因んだ「ブローカ野」やウェルニッケ（Carl Wernicke）の「ウェルニッケ野」などの存在も、脳機能局在説を強化するものである。

13. 鈴木七美『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』世界思想社、2002年、110-112頁。なおLavaterのカタカナ表記は、「ラファーター」「ラーファター」「ラヴァター」「ラヴァーター」など一定しない。

14. 「女性」についてはシンシア・イーグル・ラセット『女性を捏造した男たち——ヴィクトリア時代の性差の科学』（上野直子訳）工作舎、1994年、「犯罪者」についてはピエール・ダルモン『医者と殺人者——ロンブローゾと生来性犯罪者伝説』（鈴木秀治訳）新評論、1992年が詳しく論述している。

15. Clarke E. and Jacyna, L. S. (1987). *Nineteenth-century origins of neuroscientific concepts*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

16. 松永俊男『ダーウィン前夜の進化論争』名古屋大学出版会、2005年、67頁。なお、「エディンバラ骨相学論争」については、シェイピンの前掲論文に詳しいが、スコットランドにおける社会的利害を背景とする対立であった。
17. Cooter R. (1984). *The cultural meaning of popular science: phrenology and the organization of consent in nineteenth-century Britain*. Cambridge: Cambridge University Press. および松永俊男『ダーウィンの時代——科学と宗教』名古屋大学出版会、1996年、237-286頁。
18. 上山の前掲論文および Cooter の前掲書。
19. ロンプロオゾオ『天才論』(辻潤訳)植竹文庫、1914年(起点テキストは1888年刊)。『天才論』については、1907年の夏目漱石『文学論』、芥川龍之介「路上」(1919年に大阪毎日新聞に連載された未完長編小説)、1959年の三島由紀夫『文章読本』などでも言及されている。
20. 抄訳として中島茂一(孤島)訳『現代の墮落』大日本文明協会、1914年があり、その序文は坪内雄蔵が書いている。
21. 山下重一『スペンサーと日本近代』お茶の水書房、1983年。
22. 西周「百学連環」『西周全集 第四巻』(大久保利謙編)宗高書房、1981年、149-152頁。
23. この辞書は、英国人オウグルヴィー(J. Ogilvie)が編纂した1863年の英英辞典 *Comprehensive English Dictionary* をもとにした英和辞書である。森岡健二『改訂 近代語の成立 語彙編』明治書院、1991年によれば、『附音挿図英和字彙』は『改訂増補 英和对訳袖珍辞書』(堀達之助が中心となった『英和对訳袖珍辞書』を堀越愛国が改訂増補して1866年に刊行したもの)やロプシャイト(W. Lobscheid)の『英華字典』(*An English and Chinese Dictionary*, 1866, 1869)などを参考にしているという。
24. 同時代には古来の漢語「骨相」と phrenology の翻訳語としての「骨相(学)」のあいまいな使用例もあり、伊藤二郎編『大日本国民必携』尚書堂、1889年の「人相骨相ノ事」、中村誠三郎『土産の辻占一骨相試験』北村久吉、1890年、如電居士『骨相観』金港堂、1891年などは、オカルト的な意味合いが強い「骨相」を扱っている。
25. 文部省『百科全書』「骨相学」と同年には、『学室要論』という骨相学的観点からの教育書も文部省から出版されている(後述)。
26. Secord, J. A. (2000). *Victorian sensation: The extraordinary publication, reception, and secret authorship of vestiges of the natural history of creation*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
27. 松永、2005年、68頁。
28. 文部省『百科全書』の「骨相学」の全体像を把握するために、その目録を対訳で示せば以下のとおり。

骨相学ノ理論	PRINCIPLES OF PHRENOLOGY.
脳中諸器ト連結スル精神ノ原基才智	PRIMITIVE FACULTIES OF MIND, AS CONNECTED WITH THEIR ORGANS IN THE BRAIN.
才智ノ区別	DIVISION OR CLASSIFICATION OF THE FACULTIES.
第一類、知覚	ORDER FIRST. – FEELINGS.
第一種、嗜好	GENUS I. – PROPENSITIES.
第一、恋慕スルコト	No. 1. – Amativeness.
第二、兒ヲ愛スルコト	No. 2. – Philoprogenitiveness.
第三、居住スルコト、顔結スルコト	No. 3. – Inhabitiveness – Concentrativeness.
第四、粘着スルコト	No. 4. – Adhesiveness.
第五、争鬪スルコト	No. 5. – Combativeness.
第六、殺戮スルコト	No. 6. – Destructiveness.
第七、秘スルコト	No. 7. – Secretiveness.
第八、貪欲スルコト	No. 8. – Acquisitiveness.
第九、経営スルコト	No. 9. – Constructiveness.
第二種、意見	GENUS II. – SENTIMENTS.

(一) 人類及ヒ下等動物ニ普通ナル意見

I. SENTIMENTS COMMON TO MAN AND THE LOWER ANIMALS.

- 第十、自負 No. 10. – Self-esteem.
第十一、名誉ヲ好ム No. 11. – Love of Approbation.
第十二、謹慎スルコト No. 12. – Cautiousness.

(二) 特リ人類ノミニ固有ナル上等ノ意見

II. SUPERIOR SENTIMENTS, PROPER TO MAN.

- 第十三、慈悲 No. 13. – Benevolence.
第十四、尊敬 No. 14. – Veneration.
第十五、剛強 No. 15. – Firmness.
第十六、公明ナルコト No. 16. – Conscientiousness.
第十七、希望 No. 17. – Hope.
第十八、驚駭 No. 18. – Wonder.
第十九、想像 No. 19. – Ideality.
第二十、滑稽 No. 20. – Wit, or the Ludicrous.
第二十一、模倣 No. 21. – Imitation.

第二類、知識性才智 ORDER SECOND. – INTELLECTUAL FACULTIES.

第一種、外知覚 GENUS I. – EXTERNAL SENSES.

第二種、体外ノ万物ノ理学性情及諸般ノ関涉ヲ識認スル知識性才智

GENUS II. – INTELLECTUAL FACULTIES, WHICH PROCURE KNOWLEDGE OF EXTERNAL OBJECTS, OF THEIR PHYSICAL QUALITIES, AND VARIOUS RELATIONS.

- 第廿二、各物 No. 22. – Individuality.
第廿三、形状 No. 23. – Form.
第廿四、大小 No. 24. – Size.
第廿五、軽重 No. 25. – Weight.
第廿六、色 No. 26. – Colouring.
第廿七、居所 No. 27. – Locality.
第廿八、数 No. 28. – Number.
第廿九、順序 No. 29. – Order.
第卅、現事 No. 30. – Eventuality.
第卅一、時間 No. 31. – Time.
第卅二、音調 No. 32. – Tune.
第卅三、言語 No. 33. – Language.

弁識臓器ニ内刺衝アルノ論

Internal Excitement of the Knowing Organs – Spectral Illusions.

第三種、考慮性才智 GENUS III. – REFLECTIVE FACULTIES.

- 第卅四、比較 No. 34. – Comparison.
第卅五、原由 No. 35. – Causality.

体外ノ万物人ノ智識性才智ト相適応スルノ論

Adaptation of the External World to the Internal Faculties of Man.

脳ノ機能ハ脳ノ構造ト相関涉スルノ論

Relation between the Functions and the Structure of the Brain.

才智ヲ表示セル天然言語即其特征ナル表明及面貌ノ論

Natural Language of the Faculties, or Pathognomical and Physiognomical Expression.

才智ノ諸智ハ各相簇集シテ群ヲナスノ論

The Organs arranged in Groups.

骨相学ハ完全ノ性理学ナル餘論

CONTINUATION OF PHRENOLOGY AS A COMPLETE PHILOSOPHY OF MIND.

29. 起点テキストは、1868年に米国フィラデルフィアで出版された *In the School-room: Chapters in the Philosophy of Education* である。

30. 佐藤達哉『日本における心理学の受容と展開』北大路書房、2002年、26頁。

31. 森林太郎「ガルの学説」『公衆医事』第4巻第2号10号、1900年、同第5巻第7号、1901年（『鷗外全集著作篇 第二十五巻』岩波書店、1953年、311-329頁に所収）。
32. 武内博編『日本洋学人名事典』柏書房、1994年、湯本豪一編『図説明治人物事典 政治家・軍人・言論人』日外アソシエーツ、2000年などによる。
33. 小林病翁の活躍については、坂本保富『米百俵の主人公 小林虎三郎——日本近代化と佐久間象山門人の軌跡』学文社、2011年に詳しい。
34. 三好行雄『写実主義の展開』岩波書店、1958年、江藤淳『リアリズムの源流』河出書房新社、1989年、7-43頁。
35. 文部省『百科全書』の「修辞及華文」の起点テキスト RHETRIC AND BELLES-LETTRES は、ペイン（Alexander Bain）による執筆の可能性が高い。菅谷廣美は「修辞及華文」の起点テキストとペインの *English Composition and Rhetoric*（『英作文及び修辞』）との類似を検証し、またペイン自身も『自伝』でチェンバーズ兄弟に協力した旨を述べていることを指摘した。
36. 坪内逍遙「小説神髓」『坪内逍遙集』（稲垣達郎編）筑摩書房、1885-86/1969年、21頁。
37. 同書、58頁。
38. 坪内逍遙「当世書生気質」稲垣編の同書、61-62頁。
39. 亀井秀雄『身体・この不思議なるものの文学』れんが書房新社、1984年、24頁。
40. 江藤の前掲書、8頁。
41. 二葉亭四迷「浮雲」『二葉亭四迷 嵯峨の屋おむろ集』（中村光夫編）筑摩書房、1887-89/1971年、4頁。
42. 「写生」という語そのものは中国宋代の画論における術語に由来するが、子規の「写生」論はイタリア人の風景画家フォンタネージ（Antonio Fontanesi）に工部美術学校で指導を受けた洋画家たちの次世代、とりわけ中村不折からの影響である。子規の写生説については、北住敏夫『写生説の研究』角川書店、1953/1990年、松井貴子『写生の変容——フォンタネージから子規、そして直哉へ』明治書院、2002年に詳しい。
43. 寒川鼠骨「新四人」『ホトトギス』1900年5月（『明治俳人集』（山本健吉編）筑摩書房、1975年、302頁）。
44. 竹内洋『立志・苦学・出世——受験生の社会史』講談社現代新書、1991年、38-60頁。竹内は明治初期の週刊誌『穎才新誌』に投稿された青少年の勉強言説（「勉強ハ富貴ヲ得ル資本ノ説」や「勉強ハ身ヲ立ルノ基トナル説」など）を引用しながら、勉強立身の時代が到来しつつある様子を分析している。
45. 岩井洋『記憶術のスズメ——近代日本と立身出世』青弓社、1997年に詳しい。
46. 富士川游『迷信の研究』養生書院、1932年（『富士川游著作集3』（富士川英郎編）思文閣出版、1980年、111-310頁に所収）。
47. 富士川游「骨相と人相」『心理研究』第1巻第1号、1912年（『富士川游著作集3』（富士川英郎編）思文閣出版、1980年、351-367頁に所収）。なお1870（明治3）年末から73（明治6）年頃にかけて西周が私塾育英舎で講義した内容をまとめた『百学連環』の「知説」では、「学ノ要ハ真理ヲ知ルニアリ」「術ハ其知ル所ノ理ニ循ヒテ之ヲ行フ」として、「学」と「術」を区別する。
48. 永峯秀樹訳『性相学原論』洗心堂、1918年。『性相学原論』の訳者である永峯秀樹の生涯は保坂忠信『評伝 永峯秀樹』リーベル出版、1990年に詳しいが、永峯は沼津兵学校で学んだ後、築地の海軍兵学校や江田島の海軍兵学校で教壇に立った人物である。彼が晩年に翻訳した『性相学原論』は、退職後に phrenology の「科学的根拠に傾倒」したからであるという。永峯にはすでに『欧羅巴文明史』（仏国ギゾー氏原著・米国ヘンリー氏訳述からの重訳、1874-77年）や『暴夜物語』（アラビアン・ナイトの初邦訳、1875年）などの訳業もあり、当時の著名な翻訳者であった。柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』春秋社、1961年では永峯について、「旧幕人で甲斐の出生、維新後海軍に入り、終生海軍教育に従事していた。氏は文学の嗜みがあり、…当時高名の翻訳家であったものだ」（10頁）と高く評価している。
49. ここでの石龍子は第5代目（1862-1927）を指す。なお永峰自身は法華経の「是の如き相あれば、是の如き性あり」からの「性相」としており、石龍子の「性相」とは意味が

異なる」と述べている（保坂の前掲書、126-127頁）が、同時代言説である点は否定しがたい。

50. 中山茂春「石龍子と相学提要」『日本医史学雑誌』第55巻第2号、2009年、196頁、同誌第55巻第3号、371-376頁。中山によると、第5代目石龍子は「性相学の始祖であり観相学の泰斗」で、「明治42年頃から大正末期までの12年間は全国に石龍子ブームができる程日本の名声を得た」。また、その「性相学」を「人の容貌骨格を見て性格運命などを判断する学問」とする。

51. ジョナサン・ミラー、ステイブ・ジェイ・グールド、ダニエル・J・ケヴレス、R・C・ルーウオンティン、オリヴァー・サックス『消された科学史』（渡辺政隆・大木奈保子訳）みすず書房、1997年、一柳廣孝『催眠術の日本近代』青弓社、2006年などに詳しい。

52. ジャネット・オッペンハイム『英国心靈主義の抬頭——ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』（和田芳久訳）工作舎、1992年、261頁。

53. 同書、269頁。

54. 「psychology = 心理学」の成立は、あまりはっきりしない。西周は psychology を一貫して「性理学」と訳していたし、西周訳『奚般氏心理学』（1875-79）の起点テキストはヘヴン（Joseph Haven）の *Mental Philosophy* である。いずれにせよ、訳語の成立とは別に、「心理学」は骨相学と同様に西洋由来のものである。

【参考文献】

Chambers, W. & R. (Eds.) (18--). *Chambers's Information for the People, New and improved edition*. London and Edinburgh: W. & R. Chambers.

Clarke E. & Jacyna, L. S. (1987). *Nineteenth-century Origins of Neuroscientific Concepts*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

コーム, G. (1918) 『性相学原論』（永峯秀樹訳）洗心堂

Cooter R. (1984). *The Cultural Meaning of Popular Science: Phrenology and the organization of consent in nineteenth-century Britain*. Cambridge: Cambridge University Press.

ダルモン, P. (1992) 『医者と殺人者——ロンブローゾと生来性犯罪者伝説』（鈴木秀治訳）新評論

江藤淳 (1989) 『リアリズムの源流』河出書房新社

富士川游 (1980) 『富士川游著作集3』（富士川英郎編）思文閣出版

福鎌達夫 (1968) 『明治初期百科全書の研究』風間書房

二葉亭四迷 (1971) 『二葉亭四迷 嵯峨の屋おむろ集』（中村光夫編）筑摩書房

保坂忠信 (1990) 『評伝 永峯秀樹』リーベル出版

一竿齋宝洲 (1884/2005) 『神経開化怪談』（佐藤至子解題）平凡社

一柳廣孝 (2006) 『催眠術の日本近代』青弓社

岩井洋 (1997) 『記憶術のススメ——近代日本と立身出世』青弓社

岩崎克己 (1996) 『前野蘭化2 解体新書の研究』（片桐一男解説）平凡社

亀井秀雄 (1984) 『身体・この不思議なるものの文学』れんが書房新社

北住敏夫 (1953/1990) 『写生説の研究』日本図書センター

松井貴子 (2002) 『写生の変容——フォンタネージから子規、そして直哉へ』明治書院

松永俊男 (1996) 『ダーウィンの時代——科学と宗教』名古屋大学出版会

松永俊男 (2005) 『ダーウィン前夜の進化論争』名古屋大学出版会

- 三好行雄 (1958) 『写実主義の展開』 岩波書店
- 森岡健二 (1991) 『改訂 近代語の成立 語彙編』 明治書院
- 森林太郎 (1900-01/1953) 「ガルの学説」『鷗外全集 著作篇 第二十五卷』 岩波書店
- 中山茂春 (2009) 「石龍子と相学提要」『日本医史学雑誌』第 55 卷第 2 号/3 号、196 頁/371-376 頁
- 西周 (1981) 『西周全集 第四卷』 (大久保利謙編) 宗高書房
- オッペンハイム, J. (1992) 『英国心霊主義の抬頭——ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』 (和田芳久訳) 工作舎
- オーシェイ, M. (2009) 『脳』 (山下博志訳) 岩波書店
- ラセット, C. E. (1994) 『女性を捏造した男たち——ヴィクトリア時代の性差の科学』 (上野直子訳) 工作舎
- サックス, O.・グールド, S. J.他 (1997) 『消された科学史』 (渡辺政隆・大木奈保子訳) みすず書房
- 酒井シヅ (1998) 『新装版解体新書』 講談社学術文庫
- 坂本保富 (2011) 『米百俵の主人公 小林虎三郎——日本近代化と佐久間象山門人の軌跡』 学文社
- 寒川鼠骨「新囚人」(1900/1975) 『明治俳人集』 (山本健吉編) (269-335 頁) 筑摩書房
- 三遊亭円朝 (1965) 『三遊亭円朝集』 (興津要編) 筑摩書房
- 佐藤達哉 (2002) 『日本における心理学の受容と展開』 北大路書房
- Secord, J. A. (2000). *Victorian Sensation: The extraordinary publication, reception, and secret authorship of vestiges of the natural history of creation*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- シェイピン, S. (1986) 「エディンバラ骨相学論争」ロイ・ウォリス編『排除される知——社会に認知されない科学』 (133-200 頁) 青土社
- スタフォード, B. M. (2006) 『ボディ・クリティシズム——啓蒙時代のアートと医学における見えざるもののイメージ化』 (高山宏訳) 国書刊行会
- 菅谷廣美 (1978) 『「修辞及華文」の研究』 教育出版センター
- 杉本つとむ (1983) 『日本翻訳語史の研究』 八坂書房
- 杉本つとむ (1997) 『解体新書の時代——江戸の翻訳文化をさぐる』 早稲田大学出版部
- 杉村武 (1967) 『近代日本大出版事業史』 出版ニュース社
- 杉田玄白 (1815/2000) 『蘭学事始』 (片桐一男全訳注) 講談社学術文庫
- 杉田玄白・建部清庵 (1795/1976) 「和蘭医事問答」沼田次郎・松村明・佐藤昌介校注『日本思想大系 洋学 上』 (183-226 頁) 岩波書店
- 鈴木七美 (2002) 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』 世界思想社
- 武内博編 (1994) 『日本洋学人名事典』 柏書房
- 竹内洋 (1991) 『立志・苦学・出世——受験生の社会史』 講談社現代新書
- 坪内逍遙 (1969) 『坪内逍遙集』 (稲垣達郎編) 筑摩書房

- 上山隆大（1994）「身体の科学——計測と器具」大林信治・森田敏照編『科学思想の系譜学』（149-173頁）ミネルヴァ書房
- 山下重一（1983）『スペンサーと日本近代』お茶の水書房
- 柳田泉（1961）『明治初期翻訳文学の研究』春秋社
- 吉田忠（2000）『『解体新書』から『西洋事情』へ』芳賀徹編『翻訳と日本文化』（50-66頁）山川出版社
- 湯本豪一編（2000）『図説明治人物事典 政治家・軍人・言論人』日外アソシエーツ